初代校長　新保寅次

新保寅次校長

初代校長には、新潟県出身で鹿児島県立第二中学校長であった新保寅次が就任した。一高（東京）の出身者であり、入学宣誓式で一高、三高（京都）を凌駕せよと発破をかけ熱心に教育する一方、旧設高校の型にはめるようなことはなく、学生の自主自立を尊重した。

「（―中略）固より創立の年月に於て吾々は最も新参である。併しながら努力する新参が故参を凌駕し得ば人生の快事である。（―中略）諸君が三高を凌駕し、一高を凌駕するが如き、之に比すれば実に易々たるのみ。切に諸君の努力を望むのである。」（入学宣誓式式辞より）

学生たちは若さゆえ、時に不始末を起こすこともあったが、新保校長はたとえ外部から圧力があっても直ちに厳罰を下すようなことはなく、悪質でないものには寛大に対応し、常に学生の味方であった。学生たちはこのような校長を「親爺」と慕い、自分たちがこれからの校風を創るのだという理想に燃え、自治を尊び、自由を楽しんだ。

物議騒然！ ―大正１１年記念祭事件―

大正11（1922）年、新保校長が出張で不在の記念祭で、その騒動は起こった。原因は、寄宿生の展示物のひとつであった。それは、歴史上の人物の卒塔婆を並べておくというもので、厚紙で作った墓標に法名が記され、香花、賽銭も手向けてあったらしい。豊臣秀吉やナポレオン、小野小町などに混じって、当時存命中であった大隈重信、山縣有朋等の墓標が作られていたため、「防長の大先輩であり、国家の元勲たる山縣元帥の墓標を生前中に建てるとは、元帥を呪詛するものである、けしからん！」と、大騒ぎになった。

もちろん学生側に山縣有朋を呪詛しようという意図などなかったが、騒動はなかなか治まらず、校長の責任を問う声まで出始めた。騒動は2週間にわたり続いたが、当時の県内務部長の理解を得て戸沢教頭が尽力し、この問題を収束させて事無きを得た。

学生の他愛もない悪ふざけがここまで大騒動になった背景には、もともと他県人である新保校長の着任への不満の声があり、この問題に乗じて校長排斥運動へつなげようという思惑があったのかもしれない。

文部省での用事を済ませ、急いで帰って来た新保校長は「山口は四方に山を環として居るので一寸した事でも反響し鳴動が大きくなるから、あまり突飛な事は慎んだ方がよかろう」との訓戒をしたという。

新保校長留任運動

昭和4(1929)年7月2日朝、新保校長の松本高等学校への転任の知らせが届いた。この報を受けた生徒一同は、直ちに留任運動を展開する。各学年から計16名の委員を選出し、次の決議を為した。

「吾等一同の最も畏敬する新保校長御転任の報に接し痛感にたへず、ここに生徒大会を開いて校長御留任嘆願を決す　山口高等学校新保校長留任運動実行委員」

岩田博蔵校長

（『柳桜をこきまぜて』より）

実行委員は、山口県出身の貴衆両院議員、各地在住の先輩に援助を求める電報を打ち、山口市内各所に「新保校長留任絶対必要」などのビラを貼り、日夜演説会を開き市民の支持を求めた。また、生徒の4名が上京し、文部大臣、次官等に会見し、留任を嘆願した。

しかし、在京先輩団から、必要以上の留任運動は新保校長にも迷惑がかかるとの意見を受けた上京委員は、10日帰校後に第5回生徒大会で遺憾ながら運動の中止を決定した。

昭和4年7月、二代校長に岩田博蔵を萩中学校から迎え、旧山高は新たなる発展の時期を迎えた。

留任運動の裏側には･･･

新保校長に転任の辞令が出た同じ日に、田中義一内閣が総辞職している。田中首相と岩田新校長は個人的交友関係があり、この人事を内閣総辞職の混乱に乗じたものと見る向きもあった。騒動の背景には、生徒たちの純粋に新保校長を惜しむ思いだけではなく、田中総理が個人的に人事を玩弄したことへの反感もあったようである。

新保校長の銅像建設

新保校長の銅像の前で

旧山高では、新保校長の転任を惜しんで銅像が建てられた。生徒に慕われた新保校長であったが、新保校長もまた、山口を去るにあたっては、感慨深いものがあったようである。

「私は山口を去ってどこへやられるにしても決して栄転とは考えない。諸君の今日の御厚意に対して感謝感激の他はない。私は今日までかなり厭世的であった人生観を諸君によって全く覆された。この上はこの老躯を鞭打って更に山口に留まることができなくても教育に尽瘁しようという勇気が出た。諸君の厚意は終世胸に留めて忘却しない。」（新保校長告別式挨拶）